

学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏名	山川 伊津子
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	環情博甲第2143号
学位授与年月日	令和2年3月24日
学位授与の根拠	学位規則(昭和28年4月1日文科省令第9号)第4条第1項及び横浜国立大学学位規則第5条第1項
学府・専攻名	環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻
学位論文題目	盲導犬と暮らすことによる視覚障害者の生活と意識の変容 ー機能的・心理的・社会的支援の視点からー
論文審査委員	主査 横浜国立大学 教授 安藤孝敏 横浜国立大学 教授 志田基与師 横浜国立大学 教授 周佐喜和 横浜国立大学 准教授 長谷部英一 帝京科学大学 准教授 濱野佐代子

論文及び審査結果の要旨

盲導犬は機能的支援に加え、心理的支援、社会的支援を含め使用者を支えると言われているが、盲導犬と暮らすことで使用者がどのようなプロセスを経て生活や意識を変化させるのかに焦点を当てた研究はきわめて少ない。本学位論文は、3つの研究から、視覚障害者が盲導犬という「生きた自助具」を使用することによる生きることへの変化を、その課題も含めて検討したものである。

第1章では、最初に、我が国における障害に関わる様々な法整備状況、視覚障害者の心理面と生活面における問題などが整理された。次に、視覚障害者の屋外移動を安全に誘導する盲導犬に関する研究成果が詳細に検討され、論文の目的が設定された。

第2章では、研究1として、盲導犬使用者36名と盲導犬を使用していない白杖使用者28名を対象に生活の質(QOL)に関する調査を実施し、歩行手段の違いが対象者のQOLに関連するのかを検討した。QOLの5項目に有意差が認められ、行動範囲が広がり、社会参加を果たし、他者に気兼ねすることなく生活している盲導犬使用者の状況が確認でき、盲導犬の存在が視覚障害者のQOL向上に有効であると考えられた。

第3章では、研究2として、盲導犬と暮らすことにより、中途視覚障害を有する使用者がイヌからどのような支援を得て生活や意識を変容させていくのか、そのプロセスを検討した。中途受障の盲導犬使用者9名を対象に半構造化面接を実施し、Modified Grounded Theory Approach(修正版M-GTA)を用いて分析を行った。分析結果から、中途受障の盲導犬使用者の生活と意識の変容過程は、盲導犬との出会いの前後で大きく2つに分けられた。受障や白杖使用と格闘しつつ盲導犬との出会いがあり、徐々に生活や意識を変化させ、社会参加のしやすさや社会参加への意欲を手にしていった。最終的に、障害を抱えながらも社会の中で盲導犬と共に意欲的、主体的に生きなおす姿が理解できた。盲導犬使用はすべての視覚障害者に有用であるとは言えないものの、中途視覚障害という厳しい体験をした当事者が盲導犬と共に生きなおすことへの可能性が示唆された。

第4章では、研究2の対象者のなかから3名のライフストーリーを通して、盲導犬と出会い、生活を共にしていく中で意識や行動を変化させたのか、そのプロセスを個別に検討し、それぞれの使用者と盲導犬の関係及び使用者の変化を検討した。3名の対象者のライフストーリーからは、盲導犬との出会いにより、屋外歩行、他者との関係、自分自身の気持ちが大きく変化したことが理解できた。ただ3名とも盲導犬使用は偶発的な面もあり、当事者に盲導犬についての情報

をどのように伝達していくかは重要な課題と考えられた。また、盲導犬との別れが使用者にもたらすものは大きく、心理的なケアの体制整備も必要であった。

結論である第5章では、3つの研究を通し、盲導犬が歩行、他者との関係、使用者の心理を支援することで、当事者の生活と意識にポジティブな変化をもたらしたことの背景と関連する要因などが考察された。最古の家畜であるイヌは、ヒトと暮らしてきた3万年以上の長い歴史の中で、言語を用いないコミュニケーション能力や愛着や信頼関係の構築を可能としてきた。イヌとこのような関係性が盲導犬と使用者との間においても大きく働き、当事者の変容を促す要因となっていると考えられた。しかし、「生きた自助具」である盲導犬には日々のケアや病気やケガ、年齢的な制限や経済的な問題に加え同伴拒否、さらには「盲導犬はかわいそう」というスティグマもある。使用者はこれらの課題を抱えながら盲導犬とパートナーとして暮らしていく。3つの研究を通して明らかにしたように、それでも盲導犬との生活の満足度が高いということは、使用者にとって大きな価値があるからである。そのような盲導犬の情報をどのように視覚障害当事者に手渡していけばいいのか。特に行動範囲や情報が徐々に狭まっていく中途視覚障害への対策は重要であると指摘された。

本学位論文は、盲導犬と暮らすことによる視覚障害者の生活と意識の変化を、盲導犬の機能的・心理的・社会的支援の視点から解明できた点に学術的に大きな貢献が認められる。審査委員による本学位論文の内容に関する質疑に対して適切に回答できたこと、その他の学力・業績と合わせ、専攻の学位審査の基準に照らして博士の学位の授与に十分であると結論し、審査員は全員一致して、博士（学術）学位に値すると判断した。

注 論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。